

オルフェの遺言ー私に何故と問い給うなー (1960)

LE TESTAMENT D'ORPHEE OU NE ME DEMANDEZ PAS POURQUOI
TESTAMENT OF ORPHEUS

メディア 映画

ジャンル ドラマ

製作国 フランス

色彩 B&W

時間 82分

初公開日 1962/06/01

公開情報 東和

【解説】

「オルフェ」の終幕近い場面から始まる、コクトーの映画による遺書である。コクトーはまず、教授の息子（J=P・レオ）の所に忽然と現れる。父は死んだーとの返事に、再び姿をかき消して、今度は子供をあやす母のもとへ。戻りすぎてしまった。時空をさまよいつける詩人には教授の研究が必要なのだ。驚いて子を落とす母。次に詩人が現れたのは車椅子で死期の近い教授。またも進みすぎ。だが、老人が掌中から落とした小箱が彼を、教授の現役時代に運んだ。その小箱の弾丸を撃たれ、詩人の時間旅行は終わったが、その代わり生死の境を彷徨する、セジエスト（「オルフェ」でバイクにはねられ死ぬ詩人）との行脚が始まる。単純だが奥深い逆回しのトリックで死の領域から蘇る様々な事物。燃えた写真、千切り捨てたハイビスカスの花……。 「オルフェ」で主人公を助けた死の女王はその地位を追われ、“人を裁く”という最も苦痛に満ちた仕事に就いており、詩人と対面する。自作の絵の前に立つ詩人は、彼を定義しようと試みる少女の姿をかいま見る。手にとった花を描こうとすれば自画像になり、故郷の教会に赴けば尊大ぶったもう一人の自分を見かける。彼はこのあやふやな世界を司る大臣に会おうとして、気が遠くなるほど待たされたあげく、待ち続ける女の武神のヤリに射抜かれ息絶える。が、目をつぶったまま、また彷徨い出し、スフィンクスやオイディプスとすれ違う。そして現在に戻りかけるが、“地上はあなたの居る場所ではない”と言う、セジエストに連れられ消えるのである。詩的イメージを操って“私”映画を作り、他者に理解させるのは難しいことだが、コクトーの表現は遊び心に満ちていて、理屈抜きにその世界で羽を伸ばすことができる。

【クレジット】

監督	ジャン・コクトー	Jean Cocteau
脚本	ジャン・コクトー	Jean Cocteau
撮影	ローラン・ポントワゾー	Roland Pontoiseau
音楽	ジョルジュ・オーリック	Georges Auric
出演	ジャン・コクトー	Jean Cocteau
	エドアール・デルミ	Edouard Dermit
	ユル・ブリンナー	Yul Brynner
	ジャン＝ピエール・レオ	Jean-Pierre Leaud
	フランソワ・ペリエ	Francois Perier
	クロード・オージェ	Claudine Auger
	マリア・カザレス	Maria Casares
	ニコール・クールセル	Nicole Courcel
	アネット・ヴァディム	Annette Vadim
	シャルル・アズナヴール	Charles Aznavour